

福岡の大学生の携帯メールにおける方言使用

二階堂 整

1 はじめに

方言のオモチャ化・アクセサリー化が指摘されて、久しい(田中2001、小林2004など)。しかし、福岡で大学生の言語状況を観察していると、実感として受け入れがたい。陣内2006でも、オモチャ化・アクセサリー化についての疑問が提示されていると思われる。福岡の若年層において、方言は、まだシステムとして機能しているように思える。マスコミで話題にされるように、東京の女子高校生が様々な他の地方の方言(自分の地元の方言でない)を様々な使って楽しむといったことは、福岡では、あまり考えにくいのではないだろうか。なぜなら、福岡では、方言はオモチャやアクセサリーではなく、自分の皮膚感覚に近いものであるように思われる。はたして、方言はオモチャ化・アクセサリー化しているのであるだろうか。あるいは、福岡でもそうした方向に向かって進行していくのであろうか。

ここでは、福岡の大学生の携帯メールに関する資料を取り上げて、それらの問題を考えていきたい。携帯メールは厳密には、話し言葉とは異なる。しかし、若年層にとって、携帯メールは話し言葉とあまり変わらない、あるいは、その延長にあるものと意識されている(後述)。とすれば、携帯メールの内容は、実際の方言の状況を反映していると思われる。さらに、携帯メールは時代の先端を行くものであり、そこにおいてメールに方言がどう使用されているかは、今後、方言がどう変化していくのかも示しうる貴重な分析材料と考えられるのである。

2 調査方法など

調査は、アンケートと実際の携帯メール資料の2つからなる。

アンケートは2008年の7月に福岡女学院大学の学生を対象に実施した。中小規模の文系女子大学であり、福岡市南区に位置し、半分以上が福岡県出身者で占められる。質問の内容は、末尾の資料1を参考にしてほしい。得られた回答数は118名。留学生や社会人学生は含んでいない。このうち、未回答項目がみつかった3名は除外した。さらに、冒頭の質問項目Bによって、福岡県出身と考えられる回答に絞込み、91名をアンケートの分析対象とした。今回は、県外の出身者の回答数が少ないこと、方言の問題を考える際、現在の生活地(福岡)と出身地の違いが、回答に別の問題をもたらす可能性があるためである。ただし、メールにおける方言使用では、県外の方が注目すべき問題をもたらす可能性がある。よって、実際のメール資料の分析では、こうした学生のメール資料も対象とした(後述)。

携帯メール資料の分析では、協力に同意してくれた学生に、資料の提出を求めた。資料は、研究のみに活用すること、個人が特定されるような情報は置き換えたり、使用をさげたりする

ことをことわった。その際、親しい者とのごく普段のやり取りを提供してほしいこと、メールの相手にも承諾を求めることを念押しした。こうして、様々な実際のメールの資料を集めることができた。提供してくれた学生数は23名。大部分の学生が一連のメールのやり取りを複数分、提供してくれた。福岡出身の学生もいれば、それ以外の県の学生もいる。友人のやり取りが中心であるが、家族・知人とのやり取りも含んでいる。相手の出身地も九州各地、様々である。3-2では、できるだけ様々な相手との組み合わせをあげることにする。

3 考察

3-1 アンケート分析

アンケートの質問Bにより福岡方言話者と思われる91名を分析の対象とした。詳しくは末尾の資料1のアンケートとその集計結果の資料2をご覧ください。

携帯の所持は91名中、90名。91名のうち、メールのやり取りをすると答えた者が87名(しない・ほとんどしないの合計は4名)。その87名中、1日のメール数が30通以下の者が78名、90%である。まず、これが携帯所持者のおおよその実態となる。

さて、メールのやり取りをすると回答した87名にメールの内容について問うた。友人とのメールのやり取りで地元の方言(具体的には、福岡方言となる)を使用するかについての回答は、「よく使う・ある程度使う」の合計が74名、85%に及ぶ。彼女たちにとって、メールに地元の方言を使用することは、特別のことではなく、ごく自然なことと思われる。

この74名にどんな方言をなぜ使うのか、具体的な回答を求めた。具体例は文末表現に関するものがほとんどで、「ばい・たい・と・ちゃん・しよる・しとる」などであった。その理由については、「自然とそうなる・使い慣れている・話しているように書くから・話し言葉と同じだから」といった、使用は当然と考える回答が最も多く、それについて、「やわらかくなる・親しみがわく」などが続いた。地元使用方言としてあげられたものは、このように文末表現の関わるものが多い。後述するが、これは、変換の問題が絡んでいると思われる。文末表現の部分が方言と意識されやすい点もあるが、携帯の文字変換において無理のない(変換ミスがおこらない)ことは使用の上で重要な点である。

逆に、メールに方言を使用しないと回答した13名(15%)になぜ使用しないかと問うたが、「わかりやすく書きたい・方言だと、読みにくくなる・メールだと敬語になる」など、メールを文章語として強く意識したと思われる回答がほとんどであった。メールを書き言葉と意識している者にとっては、方言使用は抵抗のあるものであろう。ちなみに、筆者は、学生からもうメールの中に方言で書かれたものがあつた記憶がない(「会議があつている」のような気づかない方言は除く)。絵文字使用(レポートが遅れたときのお詫びの絵文字など)はよく見るが、それなりの書き言葉、敬語使用のものが届く。学生たちは日常で方言と共通語を使い分けるように、メール(の方言使用)も状況により使い分けているようである。

メールを話し言葉と同類、あるいはその延長ととらえる学生にとっては、普段の話し言葉で方言を使用しているのであるから、メールで方言を使用することはきわめて当たり前と考えていると予想される。

さらに、携帯でメールのやり取りをすると回答した87名に地元以外の方言を使用するか、尋ねた。「よく使用する・ある程度使用する」の合計は、17名、20%。一方、「ほとんど使わない・使わない」の合計は70名、80%となり、方言使用といっても、ほとんど地元方言であることがわかる。そこでなぜ、地元以外の方言を使用しないのか尋ねた。「(方言が) わからない・知らない」からとの回答が圧倒的であった。彼女たちにとっては、地元方言を使用することは、日常ごく普通のことなので、わざわざ他の地方の方言を使用するなど考えられない、地元方言使用が自然なだけに、他の地方の方言をよく知らずに使用するなどということは考えにくいことなのである。この点からも、方言のアクセサリー化やおモチャ化は福岡では現象として考えにくいと思われる。彼女達にとって、方言とはもっと皮膚感覚に近い、自分と切り離すことのできないものなのである。だからこそ、よその土地の方言を使う(身にまとう)ことなどきわめて抵抗のあることになるのである。

そこで少数ながら地元以外の方言を使用すると回答した17名に具体例と使用理由を尋ねた。「やねん・あかん」などの関西方言の例が多く、その理由も「おもしろい・楽しい・好きだから」というものが挙げられた。三宅2005でも、近年、福岡における関西・関西方言に対す好感度は若年層に高いことが指摘されており、その反映であろうと思われる。

携帯でメールを使用すると答えた87名に対し、話し言葉とメールの方言ではどこが違うか聞いてみた。「あまり違いはない」とする回答が一番多かったが、一部には変換や文章の問題を指摘するものがあった。「メールでは、イントネーションが省かれるので方言を使いにくい・変換が面倒なので、使いにくい・方言だと長くなるので、めんどくさくなる」などがあがった。とは言っても、これらの回答者は地元方言をメールで使用すると答えたものばかりであった。

メールで方言が使用されることをどう思うかについては、「いいことだ・親しみがわく」という回答が圧倒的であった。方言に対すイメージでも、「親近感を感じる」との類の回答がほとんどであった。ただし、例で「あたたかみを感じる」とあげたので、そのせいも多少あるかもしれない。

日頃、学生は方言まる出しでしゃべっているわけではない。メールの方言使用もある意味、特殊なものであり、遊びの要素はある。しかしそれはアクセサリー化・おモチャ化が進んでいるとは見なしえないと思われる。

3-2 携帯メールの分析

実際の携帯メールを資料として提出してくれた学生数は23名。福岡出身の学生もいれば、それ以外の県の学生もいる。基本的に女学院大学の友人同士のやり取りが中心であるが、家族・知人とのやり取りも含んでいる。資料は、絵文字などを二重線(≡)で表示する。以下の資料の改行なども、実際の携帯の画面上のものとは異なる。個人が特定されるような情報は書き換えてある。わかりやすくするために、筆者が()で言葉を補っている部分もある。また、ここでは、福岡県出身以外の学生資料も扱う。福岡女学院大学では、学生の半分以上が福岡県出身者であり、福岡市に位置するため、言語勢力としては、福岡県方言、特に筑前方言が一番の力を持つ状態である。そのため、筑前方言話者同士が自分の方言でやり取りすることは、言語状況上、起こりやすいと思われる。よって、できるだけ、他県出身で、現在、福岡女学院に在

学する学生の資料をあげるようにする。また、福岡県内でも、筑前・筑後方言と北九州・筑豊の方言とはかなり異なっており、それらの資料もあげるようにする。具体的に方言を指摘（資料に下線を入れる）する場合でも、狭い意味で当該方言のものと同時に、広く使用される（九州で広く使用など）ものも指摘する。なによりもメールで使用されることが重要なことであるためである。

まず、筑前方言話者同士（学生）の会話を上げる。

A : B (相手の名前) ■今日バイトあると■ ■
 B : ねーふ■ ■なんでや■ ■
 A : いや■ ■テストがヤバイけんが勉強しようかなッて思ったと■ ■ ■ ■ てか、Q (バイト先の店員の名) 辞めるげなよ■ ■
 B : 勉強しよーばい■ ■ ■何時からする ■ ■ ■ Q やめると■ ■ ■ うれしいけどうちもはやめたい■ ■ ■ てかあの店やばくね■ ■
 A : いや、けど私部活 ■ ■ あるっちゃん■ ■ ■ やけん遅くなるけどそれからでもあんたがいいならしたい■ ■ ■ 無理なら全然よかばい■ ■ ■

疑問の「と」、原因・理由の「けん」、伝聞の「げな」、文末表現の「ばい」、比較的最近の表現の「ちゃん」、「か」語尾など、福岡の筑前方言がふんだんに使用されている。ただし、一方の「ばい」の使用はやや不自然である。

次は、筑豊方言同士の会話である。前者が、友達同士（学生A・B）のメール、後者が母親（C）と娘（学生）（B）の会話である。Bは同一人物である。北九州や筑豊で使用されることで知られる「ち」、原因・理由の「き」（筑前・筑後では「けん」、さらに「何で」にあたる「なし」が出てくる。

A : 5組の集まり行かん？
 B : 多分行くっち思うけど…8月入らな分からん
 A : そーなん ■ ■ Bさん達が行かんなら私行く意味ないし〜

B : 迎えきて
 C : なし (なぜ) ?
 B : 熱いき ! (「暑いから」) !
 C : 了解 !

今度は、異なる方言話者同士（学生）の使用で、筑前方言Aと筑豊方言Bの会話である。

A : B (相手の名前)ーっ ■ 明日ね、2時間ぐらいいしか遊べんらしい ■

B : それでもよか ■

A : 10時40分ぐらいにQ高校につくんやけど ■ どうかね

B : いいよ・・遊べんより全然いい 10時40分前にQ高の前にスタンバっちょくき、ついたら ■ (電話) して ■

B (筑豊方言) が、アスペクト表現の「ちょく」や原因・理由の「き」を使用している。Aの筑前方言では、それぞれ「とく」「けん」となる表現である。このように相手と異なる方言を気にせず使用している点が注目される。

以下は鹿児島方言同士 (学生) の会話である。「が」「せん」にその方言の特徴が表れている

A : 「抹茶パフェ食べに行くがあ ■ 笑」

B : 「行くー・・・・・」

A : 「ぢゃあ終わったら行こう ■ ・・・・・多いせん ■ ■」

B : 「・・・・・多くないせん ■」

A : 「多いせん ■」

次は熊本方言同士 (A女性 (学生) B男性 (友人)) の会話。「だご」「さしより」「ばい」などの使用が見られる (Bは熊本在住)。

A : ごめん授業だった ■ だご疲れた ■ 笑 さしより帰りたいけどパソコンして帰らなん ■

B : 俺今帰って来たパイ ■ パソコンせなんと ■ だりいね

次は佐賀方言同士の会話である。学生Aと母親Bとのメールをのせる。有名になった「がばい」をはじめとして、「ごたっ」「そいぎ」など、佐賀方言がメールにもかかわらず、自然な表現で多く使用されている。

B : 元気しとんね? 今日の夜ご飯はなんば食べたとね?

もうすぐAちゃん (学生Aの名前) 誕生日やけん もしこっちに帰ってくるごたッなら早めに言いしゃいね! いろいろ準備のあるけんが。

A : 元気しとッよー! 今日の夜ご飯はオムライス作って食べたよ。がばいおいしかったし。わかったー。もし帰ってくるごたッぎまたメールするけん。

あッ。もお米のなくなろうでしよるけん近々送ってね。よろしく。そいぎね~ ■ おやすみ

次に鹿児島方言Aと長崎方言Bとの会話を示す。すでに二人とも福岡に移住して2年が過ぎようとしている学生であるが、それぞれが、自分の地元の方言を使用している。

A：やっほ■い■B（相手の名前）ボーリング■行くなって言ったけ？■
 B：行きたい■もうボーリングの予約とととと？
 A：とととと■って何■笑 お菓子みたい■予約まだしてないっばいよ■人数決まってないし■
 B：人数集まってないんだ■じゃあ、Qちゃんも、誘っとくばい■
 A：Bは行くんよね■？笑 急にQチャン出てきたよね■笑
 B：うん■行くばい■Qちゃん、この間、ボーリング行きたいって言いよったけんが■
 A：まじで？■Qチャン■ボーリングのイメージないわ■笑R君達も行くのけ？
 B：そう？やる気満々やったばい■R君達も行きたいって言いよったばい■
 A：まじで？■沢山の方が楽しいしね■じゃあ■Sに言っとくね■Tにも誘ってよか？■暇らしい■笑
 B：いいよ■沢山の方が盛り上がるけんね■どこのボーリング場に行く予定なん？
 A：X（場所の名）とか言ってたけど■何かU■が幹事するっばい■大丈夫け■？笑
 B：Xかあ■良いばい■Uが幹事か■心配なんやけど■
 A：だからよ■笑 まあ超■張り切っているし■応援しよう■とにかく楽しみだし■
 B：だね■また、詳しいことが決まったらメールしてね■今から、Aちゃんの家にくっけん■
 A：まじかよ■メールしてる意味ないし■笑つーか■ちよい5時まで用事あるから待ってて■
 B：分かったばい■来る前にメールすっけんね■
 A：あたしが■帰ったら電話するよ■またいろいろ語るが。■
 B：語ろう②■まっとるけんね■
 A：はあい■

Aは鹿児島方言の「け」「が」「だからよ」を使用し、Bは長崎方言の「と」「ばい」「けん」「来る」などを使用している。互いがそれぞれの方言でメールを取り交わして、それが自然にやり取りされている。「とととと」もおもしろがって、受け止めている。

筆者のゼミでも以下のような場面があった。宮崎出身の学生が、ゼミの仲間へのメールで宮崎方言を使用してよく送信するため、他の学生が理解できないことがあることが話題になった。その際、他の学生がいつせいに「わからん」と叫んだが、それは、「非難」というよりも「まいった、まいった」というニュアンスであった。言われた方も、「エヘッ」という感じで、悪びれていない様子であった。それぞれが、それぞれの方言を使うことを許容する雰囲気があるように思う。それがメールの方言使用にもつながっていると思われる。方言が皮膚感覚であるからこそ、互いが、それぞれの方言を使用することは、ごく自然なことと受け止めていると思われる。

また、他地の方言も全く使用しないわけではない。最後にそうした例の1つを見てみたい。次のものは、筑前方言の話者同士（A男性 B女性（学生））の会話である。お互い、筑前方言を使用するだけでなく、「他の地方の珍しい方言とかも使ったりします「ちばる・けっばれ・えがった」、どこの方言かはわからないけど、使ってて楽しいから使ってます」とのことである。

A：今日めっちゃびっくりしとったやんね■笑 それ見てめっちゃ嬉しかたよて■

バイト前 B(相手の女性の名前)テンション低かったけんが元気にさせようと思って待ってたんよて■笑

でも急ぎよるときにごめん■ケドBと会えてよかたよて■笑

疲れとるよね・・今日わ早めに寝るとばい■

B:今日はありがとす■

バイト憂鬱やったけんが、まちR(地名)におったときバリ嬉しかったバイ■

(中略)

A:よかた■Bが元気になってよかた■ほんまえがった■

(中略)

B:ほんまおかげでバイト頑張れたさ■ほんまえがったきね〜■

明日は学校ばい・Aクン(相手の男性の名前)も、けっぱりネ■

遅くまでバイトの帰り待とてくれてあんがと■

筑前方言である、アスペクト表現の「よる」「とる」・原因・理由の「けん」・文末表現の「ばい」・程度副詞の「バリ」などが使われている一方で、「めっちゃ」・「ほんま」・「えがった」・「けっばれ」・「さ」など、他地の方言も使用している。自分達の方言をしっかり使用しつつ、「楽しみ」としての他地の方言使用がなされている。やはり、まず、自分の方言が基盤にあるのである。

4 まとめ

以上、携帯メールにおける方言使用の状況を見てきた。福岡では、アンケート結果に見るように、よく地元方言が使用され、それは、日常での地元方言の実態の反映であるかと思われる。方言はオモチャ化・アクセサリー化するといったものではなく、学生たちにとっては、皮膚感覚に近いものであると思われる。いまだ、若年層にとっても、方言はシステムとして生きているのである。これは、おそらく福岡に限らず、九州あるいは、もっと広く西日本にみられる状況なのではないかと思われる。自分の使用する方言は、自らのもの・皮膚感覚に近いものであるだけに、オモチャ化・アクセサリー化は逃げにくく、まして、他地の方言を使うなどは考えにくい(知らないのは使えない)ことになるのである。自分の方言が肌になじんだものだけに、他地の方言を使用することは、あたかも人様のものを一時、拝借して使用するような居心地の悪さにつながり、一部の例外を除いて、行われないのである。

ただし、これらの方言も変化の可能性を秘めている。メールには、変換という問題がつきまとう。したがって、方言といっても、変換の支障にならないような、文末表現が多用されている。バイ・タイの使用はそれを物語っている。うまく変換できないものは使用が自然と避けられてきているのである。さらに入力が面倒な敬語形式など(入力負担が大きく、文も長くなる)は、めんどくさいとのことで避けられている。例えば、メール資料では、よく促音の「っ」が表記されない箇所が見られるが、それも、1つの兆候(入力の負担軽減)であると思われる。

現在は、日常生活での話し言葉としての方言が、携帯メールに反映した状況であるが、メールの役割が拡大してくるにつれて、逆に、メール特有の事情が、実際の方言に影響を与える可能性もありうる。メールでよく使用される(されやすい)方言が、日常でもよく使用されるよ

うになってくることもありうるのではないだろうか。

今後も、携帯メールの方言使用を見守っていく必要があるように思われる。

謝辞 アンケートやメール資料提供に協力して下さった皆様に感謝します。

【参考文献】

- 田中ゆかり 2001 「携帯電話と電子メールの表現」飛田良文・佐藤武義編『現代日本語講座』
第二巻 明治書院
- 小林 隆 2004 「アクセサリーとしての現代方言」『社会言語科学』7 (1) 社会言語科学会
- 三宅和子 2005 「携帯メールの話しことばと書きことば」三宅和子・岡本能里子・佐藤彰編『メ
ディアとことば 2 組み込まれるオーディエンス』ひつじ書房
- 三宅直子 2005 「関西域外における関西方言の受容について」陣内正敬・友定賢治編『関西
方言の広がりとコミュニケーションの行方』和泉書院
- 陣内正敬 2006 「方言の年齢差」『日本語学』25 (1) 明治書院
- 三宅和子 2006 「携帯メールに現れる方言」『日本語学』25 (1) 明治書院

(にかいどう・ひとし)

資料1 アンケート内容

メールに関する大学生調査票

2008年7月 二階堂

現在、若い人の使う携帯メールに関して、調査中です。よろしければ、回答にご協力ください。回答は統計的に処理し、取り扱いには注意します。

以下の質問にお答えください。該当する数字に○をつけて下さい。

A あなたの学年を教えてください

1. 大学1年 2. 大学2年 3. 大学3年 4. 大学4年

B あなたは自分自身が、主に、どこの方言の話し手だと考えていますか。自分の思うところを地域名（都道府県名と市町村名）で、書いてください。

例 福岡県久留米市の方言の話し手

() 県 () の方言の話し手

問1 あなたは、携帯を持っていますか。

1 もっていない 2 もっている

1と回答した方は問9へ 2と回答した方は、次の問2以下に答えてください。

問2 その携帯でメールのやり取りをしますか

1 しない 2 ほとんどしない 3 する

1・2を回答した方は問9へ 3と回答した方は、次の問3以下に答えてください。

問3 あなたは普通、一日におおよそ何通ほど、メールのやり取りをしますか。あなたの送信回数で答えてください。

1 10通以下 2 11～30通 3 31～50通 4 51通以上

問4 友人との携帯メールのやり取りで、メール本文に地元の方言（出身地の方言）を使用しているか、お伺いします。あてはまるものにひとつ○をつけてください。

1. よく使っている 2. ある程度使っている 3. ほとんど使わない 4. 使わない

問5-1. 問4で、1や2を回答した方に伺います。それは具体的にどこのどんな方言ですか。さらに、なぜ、それを使用するのですか。以下に自由に記入してください。

例 バイ 福岡方言 親しみがわく。

問5-2. 問4で、3と4を回答した方に伺います。それはなぜですか。

問6. 友人との携帯メールのやり取りで、メール本文に地元以外の方言を使用しているか、お伺いします。あてはまるものにひとつ○をつけてください。

1. よく使っている 2. ある程度使っている 3. ほとんど使わない 4. 使わない

問6-1. 問6で、1と2を回答した方に伺います。それは具体的にどこのどんな方言ですか。さらに、なぜ、それを使用するのですか。以下に自由に記入してください。

例 ダベ 東北弁 おもしろそうだから。

問6-2. 問6で、3と4を回答した方に伺います。それはなぜですか。

問7. 普段の話し言葉の中の方言と、メールにおける方言では、どこか違いがありますか。

問8. メールの中で方言が使用されることを、あなたはどのように感じますか。

問9. 方言に対す、あなたのイメージを自由に書いてください。 例 あたたかみを感じる。

資料2 アンケート結果（各問の内容は、資料1参照）

問1		
回答	回答数	比率
1	1	1%
2	90	99%

問2		
回答	回答数	比率
1	1	1%
2	3	3%
3	87	96%

問3		
回答	回答数	比率
1	38	44%
2	40	46%
3	6	7%
4	3	3%

問4		
回答	回答数	比率
1	41	47%
2	33	38%
3	12	14%
4	1	1%

問6		
回答	回答数	比率
1	3	3%
2	14	16%
3	41	47%
4	29	34%